

いちご新品種「スカイベリー」の品質向上技術の確立

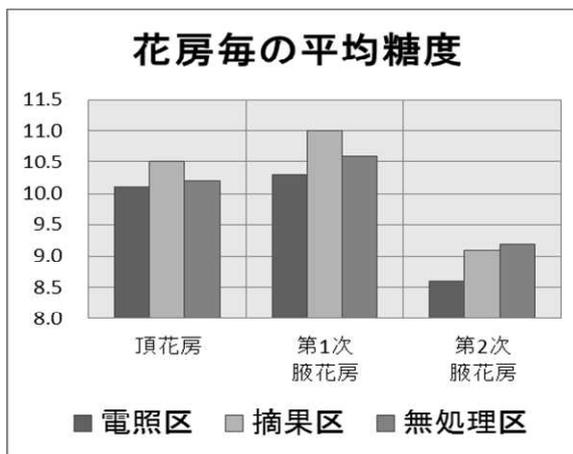
要約

電照することで生育が旺盛となり 2 割超増収となったが、果実重及び糖度は総じて減少した。また、摘果(花)することで、おおむね糖度が高くなり果実重も増したが一時的で、春先以降の効果は判然としなかった。収量は無摘果(花) 区に比べ 1 割超増収となった。

従って、品質を向上するためには、電照を行わず摘果(花)を導入する必要があるが、摘果(花)方法や草勢管理などをさらに検証・改善し、全期間を通じて高品質を維持できる技術とする必要がある。

品種の特性を最大限に発揮できるよう作型のさらなる検討、果実品質改善に関する課題解決が必要である。そこで、電照の有無と摘果(花) の効果について検討する。

○ 主な成果



電照することで葉の展開が促され、全期間を通じて草勢が維持されたことで、収穫の前倒しや腋芽の充実につながり、果実重や食味について摘果した区に劣るものの、3 区の中で最も多収穫となった。しかし、総じて糖度は低くなり、果実重も小さくなった。

摘果(花)した区については、果実重増や糖度向上効果が認められたが一時期であり、期待した全期間を通じた効果とはならなかった。摘果により高い糖度を維持している管内事例もあることから、摘果作業の仕方などで効果が変わるのではないかと考えられる。

○ 今後の方向性

現在食味向上が最も重要な課題となっていることを踏まえると、電照の導入には問題がある。一方の摘果(花)については、やり方等を精査することでより効果を得ることが可能と考えられる。今後は、労力確保等の課題を整理し、摘果(花)導入を推進する必要がある。

実施機関： 芳賀農業振興事務所経営普及部 実施場所： 真岡市

問合せ先： 栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315